守隨憲治著作集

第五巻

諸論考・小説篇
諸論考・芸能篇
続 役者論語
鳥取池田藩芸能記録

守隨憲治著作集

第五卷

守随憲治著作集　●第5巻

昭和54年 6 月30日　初版発行©　　¥ 7,500

著　者　守随憲治
発行者　池田猛雄
発行所　有限会社　笠間書院
〒 101 東京都千代田区神田神保町 1-46
☎ 03-295-1331(代)　振替東京 1-56002

検　印
省　略

3091-957031-0924　　科学図書印刷・手塚製本所

刊行のことば

近世国文学界の泰斗守随憲治博士の業績中、偉大な足跡がしるされているのは、歌舞伎と操り浄瑠璃という、江戸時代を代表する二大演劇の分野である。昭和六年の『近世戯曲史論』をはじめ、『歌舞伎劇戯曲構造の研究』『歌舞伎通鑑』『歌舞伎序説』など、文献学的実証性を基盤としながら、総合舞台芸能としての特性にも充分な考慮を払われ、趣味に流れがちな演劇研究の科学性を樹立された。就中、昭和六年刊の『歌舞伎図説』など、画証資料の学術的考察の、先駆的、記念碑的な業績であった。

ここに、博士の著述中の代表作を選び、本集五冊、別集一冊の全六冊の『守随憲治著作集』を刊行することは、国文学研究の現状にあって、大きな今日的意義があると信ずるものである。

昭和五十一年秋

守随憲治著作集刊行会

守随憲治著作集　第五巻　目次

刊行のことば

諸論考・小説篇……一

諸論考・芸能篇……一三三

続　役者論語……二〇五

鳥取池田藩芸能記録の発掘……二八一
——近世初期芸能資料——

編集後記

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

諸論考・小説篇

目次

近世文学史観 ……七
——上方文学の性格に関して——
江戸文学に現れたる卑近美 ……一七
上方文学の民族文化面 ……三三
大坂と江戸との城下町の構成 ……四四
——近世文学の基盤として——
「仮名」ということば ……五一
仮名草子に関する問題 ……五四
西鶴文学の立体性 ……七五
訳と才覚 ……七九
江戸時代の文芸と中国小説 ……九三

源氏物語と近世文学……一〇三
正親町町子の作風……一〇八
浮世夢助語……一一五
洒落本の輪廓……一二〇
福沢諭吉観……一二五
——文明開化の説——

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

近世文学史観

――上方文学の性格に関して――

上方と江戸という、その上方の文学の性格を、上方を京と大坂とに両分した場合の、大坂の性格と解釈する。今日も、われわれは東京と対比して大阪を考える時の、大阪の性格は明かに、独立したものとみている。しかもその今日の大阪は近世江戸時代における大坂から直接流れている性格の持主だと思う。今日も見得る、大阪人の生活や大阪市街の形勢を、三四百年前のものと同一と認められると思うのだ。その意味をここに略述してみたい。あの大坂文芸は大坂人にして、始めて形成することができたのであり、その大阪人は、大坂市街が育成してできた人達なのだといえると思う。

大坂市街の構造は秀吉によって形成せられたとみる。秀吉の政治的意図の具体化と大坂市街の都市的成長過程とが、ちょうどあの時一致した。この契機が、大坂という近世的一特異の性格を築き上げることに成功したのだ。

まず市街史としての大坂を考える。中世都市が近世都市へ変貌する時代が、秀吉を中枢とする人文史において展開した。すなわち荘園経済の都邑がいわゆる社寺都市ともなり港湾都市ともなるという過程、知行経済の都邑が解体し発展して、政治都市となり宿駅都市となるという過程、この二方向が、地勢的歴史的の性質と作用とによって、一致した位置を大坂において発見するのだ。

社寺都市の成長は荘園経済からの独立にあったとされているが、その充実は、自身の経済的発展によるものだった。それが自然の条件や人為的方法の加わることによって、到達する場合と失敗する時とあった。性格として、他種的なものが加わって、複雑な充実方法をとって成功していったようである。中世から近世への行進は大抵そういうふうにみえる。しかしそれと交替するように、知行経済による城下町の変遷の急激な行進がみられて、新たに政治都市を見出すようになったのだ。中世末期に近く、農民商工武士等の混雑が、武士主体に向って一応の整理がみられた後、改めて商人の擡頭となって、武士対町人の内容となるか、又は町人主体の内容となるかの改変が近世にかけて実現していった。城下町すなわち政治都市自身の、右のような成長過程は、社寺都市の政治的歴史性の上に、交渉なしには、中世より近世への成長がみられなかったという点に、注目さるべきものがあるのだ。

これらは国内的経済状況から生まれた歴史的発展相であったが、対外的経済の成長過程が加わって、まず荘園経済時代に、港湾都市の発生発達がみられた。ちょうど国内における市場の固定と同様に移動する市場の出現も要求されたのである。それが海路の交通を開拓することに乗じて、積極性を帯びた。貨幣の交流、商品の流行が実現する時期に際して、当然この方面が開拓されねばならなかったはずである。従って又、ここの住民も農町主体の時代を離れて商工主体の時代に入る場合と一致することとなる。武士の名目は事実上、その下位に吸収せられることとなって成長していく。この勢いは社寺都市を侵す場合もあり、政治都市の性格を改変さすこともあった。

ただ港湾都市は成長時代において、完全な商工生活に安堵することの成らなかったほどの、軍事活動の残存した情勢にあった。この事が、結局宿駅都市の発達充実に役立つ枢要な動機をなしたとみられる。知行的経済時代に入って後であるが、城下町のごとく、固定的な又純粋な軍事目的から成長したのでなくて、多分に活動性を帯びた、又和平生活を目標とした点に、歴史的の進歩性も認められると言えるかも知れぬ。城下町的な要求もないではないが、その

上位に交易経済の観念を植えつけて、当然港湾都市以上に、商工の膨脹を中心に農民等の流入、武士等の変貌移入というような時代的特殊様相を加えて成立をしたものだ。陸路交通は海路交通よりも開拓は容易である。進歩も早い。これが中世にあって、一度抑えられていた観があった宿駅都市が、近世初頭の頃には、たちまち港湾都市を凌ぐようになったゆえんだと思う。あるいは港湾都市を改質せしめる所までも行ったとみられるのではあるまいか。

このような概念は、中世から近世へかけての封建性の変革を物語っている。近世も封建性時代とみねばなるまいが、それは中世におけるごときものでなくして、第二次封建性とも言いたき性格である。実質的には、封建性を破り、その上を支配する新勢力が十分実力を示してきたのである。武士と町人という対比の実質も既にこの期間に考えられていいのだと思う。武士が戦闘人でのみいたのでは、歴史的生存が否定されるのである。遙かに政治性を持たねばならなくなった。和をもって制する技術を消化するのではなくては、時代から遅れてしまうのである。戦国乱世の結末をつけたのが、決して武力によったのでなく、新たに開拓された政治眼と経済眼との上に立ったものであった。このような解釈を、大坂という都市の成立について考えてみる。

順序として、第一には、石山から大坂への転地をみたい。石山別院を蓮如が創めてから信長のために攻略せられて、天正八年開城となるまで、八十五年間という。信長の石山攻が普通の史上に伝えられるような、彼の命に抗した徒輩を討つというだけの事、もちろんその背後には、彼の念願に対して、仏教徒の勢力の侮る可からざるを抑える目的もあったに違いないが、そういう建設を伴わぬ壊滅事業に終ったのなら、児戯に類する訳と思う。ただ真の目標を知る前に、彼自身が本能寺で滅んだから、その仕事は、直接秀吉による継続と考えねばなるまい。さてそこまでの石山の情況をみると、完全な社寺都市としての成立をみていたと想像せられる。しかも仏教宗派の社界の色濃い宿駅都市としても成立したのである。信長が京都に接する所の、宿駅都市として活用しようとする志望があったのかも知れぬ。

同宗派として、北陸地方との関係が決して平凡な位置でないことは想像せられる。しかし、そこまでの都市的生命であったことが、石山の意義であった。開城後、池田信輝の市街改造があったらしいが、それも潰滅後の復興という程度であったろうと思う。

天正十一年秀吉が手をつけた。すなわち天守の建築を命じたのだ。日夜三万の人夫を使って改造を急いだというが、兼ねて市街の整備にも当った。石山時代の三の丸が平坦にされて、市街に入れられ、ここに町人を住まわせた。諸国の大小名の邸も並んだという。これは慶長近くになってかららしいが、既に当時は、諸侯も本国より米穀を輸送してきたし、生活物資の売買も行われていた。傾城町が天正十三年許されたという説は、疑問視されているが、相当早かったらしいことは肯ける。天満の商人が海外との貿易に従ったという記録もある。安南、東蒲塞、ボルネオ、ルソン、シャム等の地名があげられて、イバラキ屋とかヒワダ屋とかいう屋号も伝えられている。かくて大坂は面目を新たにして殷賑を極めたのだが、石山が特殊の宿駅都市であった性格の上に、秀吉としては港湾都市としても、大きな希望をかけ、更に政治都市としての宿望も兼ねさせたとみられる。

政治都市的宿駅都市たる性格と、港湾都市的宿駅都市の性格を併せ備えしめた所に、大坂の偉大なるゆえんがあるのだ。市街開発に際して、町人を移駐せしめたが、町人等の中心は伏見の者と堺の者とであった。伏見は名勝の地であり、河川に沿う村邑であったものを、秀吉が、伏見城を築いて町としたもので、昔の木幡山が城山と改められたもので、諸侯の館相並び新たな城下町を出現したものである。秀吉の伏見城築構の意図が奈辺にあったが、これは臆測しかねる。伏見川を利用した政治都市たるものか、名勝地という性格をこれに加えしめたものか、その辺だろうとは思うが、しかし彼は大坂の更生のために、伏見の町人に移住を内示して、大部分を大坂へ吸収したのだ。結局秀吉の進取性が、伏見を安定せしめなかったのであろう。伏見の町人とはいかなる内容のものか。詳細は解釈できぬが、少くも

秀吉に随従した輩である。かつて秀吉が伏見に築城した際に、彼の膝下に馳せ参じた人々である。秀吉の性格に通ずる所を持った者とみることができる。さればこそ大坂市街の町家を整えるに当って、まず伏見の衆に誘いをかけたのだと思う。

堺の方は荘園経済の生活から、山名大内に領せられた間に西国との航路の要津となった。そこでたちまち港湾都市として独特な成長を遂げたのである。これは中世末期における、西日本が開拓した海外貿易という特殊事情が生んだ急変ではある。納屋助左衛門が天正中ルソンに渡り文禄に帰朝して、秀吉に外国品を捧げたということは有名な話だ。堺の茶が信長に進められ、宗長とか紹鷗とか宗易とかいう人によって茶道が行われたことは、一面からいえば、最新の舶来風俗の実践家なのであった。小西如清の薬種業もそうである。鉄炮又といわれた鉄炮鍛冶又三郎の存在も同様である。南蛮紋という金属の分析術は明の人白水が堺で教えたもので、蘇我理右衛門は彼から術を受けて京に出て吹所を初めた。堺のごとき小都市がこのように充実したことは、港湾都市としての性格のみでなく、加うるに文化の中心地京に連鎖を持つ宿駅都市としての性格をも兼ねたのだった。京の西陣が堺から移った事実などは、よくこの点を証明していると思う。しかして、ここまで充実した堺の津は、もはや展開の方面を発見できなかったろう。信長も関心を持っていたが、一層強く注目したのは、秀吉だった。堺を更に充実さす手段、更に巨大化さす手段を、彼はとった。これが、方法としては逆になったが、大坂の中に堺を吸収することだった。この意味では、大坂は堺を膨脹させたものだということになる。大坂は歴史的にも当然持つべかりし港湾都市性格を、堺の吸収によって、始めて自己の中に悟ることができたのだ。

大坂城の築構は天正末であったが、大坂市街の充実は文禄慶長に及んでいる。その間、安土城聚楽第伏見城というような、大土木事業が傍系的に実現されて行ったのであるから、当然それらが大坂市街の完備に向って、集中していっ

たのである。海外貿易と朝鮮外征とが、それらの間を縫って横たわった。外征の目標が不可解という点で報告されているが、航海術の進歩、特に裏日本航路と西日本海路の急速な改革とは、経済界に革命的な基礎変化を齎した。又工芸技術の輸入が生活文化面に根強い改良をきたしたことも事実である。特に印刷術のごときは、当時朝鮮では独自の改良が実行されていたのだったから、技術も技術者も直輸入される便宜をえた。一字版の輸入によって、出版界が目覚めて、特殊な範囲の応用から事業は初まったが、たちまち全文化界を救済するようになったことは、解説するまでもない。海路の部分を注目すると、後に江戸も開拓されてゆくが、日本全土の位置の上からいって、やはり西の方が開けている。又産額や製産の種類からいっても、西は東の比ではない。西は海外貿易にも連なる。しかも事業そのものとして、東国にみられぬ歴史的経験を持っている。経済界全体が大坂を中心として、西日本において、この方面が開拓されて行くのが当然であった。その点については、大坂は全国に対して、名実共に優位を占めていた。この場合国内的に注目されることは、秀吉の時代、既に城下に移駐させられていた諸侯が、各々本国から米穀類を海路輸送して来た事実だ。この裏付をもって、徳川氏の時代に入って米市場の立ったことも、米相場が経済界の指導的位置を占めたことも、それらが大坂を中心に実行されていたことも、容易に肯けるのだ。

しかし大坂が西日本の文化的経済的中枢として、著実な安定を得るようになったのは徳川氏の時代に入ってからで、時間も人為も十分必要とせられながら、達成したのであった。ただ大坂が特に、その達成を示しつつも、極めて積極的であり、積極的でのみあるような性格の類を持っていることが、われわれは証明せられる。その結果が、批判は別にして大坂の文化や生活の根底的なものたる形式をもって、全般的な行動を示し出したといえると思う。この性質は徳川氏の時代を迎えてからの事と考えるのは当るまい。秀吉による大坂都市の構成からでなくてはならぬ。すなわち秀吉の性格が大坂都市を完成した、それであると思う。大坂はあらゆる事業を、文化事業に限らず、発生させ応接す

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com